新納忠元 にいろただもと 生誕500年 1526－2026

伊佐市

新納忠元物語 八

伊佐市立菱刈郷土資料館　指導員　原田純一

曽木天堂ケ尾での忠元と秀吉との会見（後編）

忠元は、秀吉との会見に行く前に成就寺で髪を剃って、『拙斉』と改め、五月二六日の夕暮れに曽木の天堂ケ尾に出頭した。石田三成や細川幽斉などの重臣を従えた秀吉は、平伏して進み出た忠元に、直々に、『武蔵や武蔵この上も我に敵対すべきや』と問いかけたところ、忠元はかしこまり『何事も主君 義久公の意のまま、義久公さえ思い立ち候はば、幾度でも敵対つかまつりべし、しかしながら、義久公かくの如く御和議いたしました上には、一切を裏切るまじく、忠元また然りであります。』と答えた。秀吉は、その忠勇と剛胆さに大いに感心して『長刀一振』を与えた。

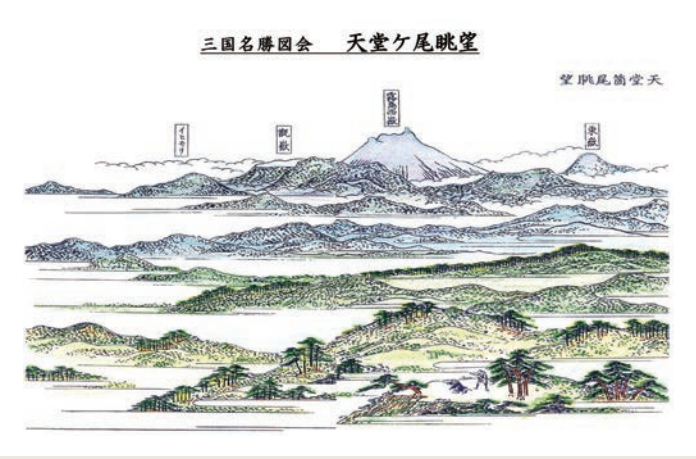
その後、秀吉は忠元に杯を取らせるが、忠元がなかなか顔を見せようとしないため、今度は、『道服一領』を与えた。それでも忠元が顔を上げなかったので、秀吉側近の細川幽斎が、忠元の口髭を見て『口のあたりに 鈴虫ぞなく』と下の句を発句すると、忠元はにっこりと笑い顔をゆっくりと上げ『上髭を ちんちろりんとひねりあげ』と上の句を即座に返歌した。この一連の様子をみて秀吉はもちろん並みいる秀吉軍の諸大名一同は忠元のことを、『聞きしに勝る武士よ、剛胆、忠勇、文武両道の武将である。』と感嘆した。

この連歌問答はあまりにも有名であるが、下の句を発句したのは、秀吉自身であるとか、「口のあたりに」が「鼻のあたりに」とか、「鈴虫ぞなく」が「松虫ぞなく」などの諸説もある。

天堂ケ尾で忠元と会見をすませた秀吉は、翌日五月二七日朝出発して、意気揚々と京への帰途についた。

『関白陣跡』に大きな石碑がある。大正五年（１９１６年）に西太良村の連合青年会と在郷軍人分会が碑文を『関白陣跡』として、日露戦争のとき海軍大将で鹿児島市出身の東郷平八郎に揮毫をお願いしたが、なかなか執筆してもらえなかった。確認に行ったところ、東郷大将は、我が郷土薩摩を蹂（ふみにじった）秀吉の史蹟とすることを好まず、最初は快く揮毫をしなかったと言われている。その後、誠忠無比・武勇絶倫、薩摩武士の典型と言うべき忠元の史蹟として残すこととなり、「新納武蔵守忠元碑」と揮毫することをお願いしたら、すぐに揮毫してくれたと伝えられている。この話は薩摩人には、実に感銘させられる話である。

☆次回最終回は
『伊佐市内における
忠元関連史跡の紹介』



（参考資料）
・旧記雑録拾遺　忠元勲功記
・大口市郷土誌　上巻267～277ページ